

---

# 幽遊白書と雪姫 + 旅団

ひよこだよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽遊白書と雪姫＋旅団

### 【Nコード】

N0668S

### 【作者名】

ひよこだよ

### 【あらすじ】

ハンターハンターの世界で幻影旅団と過ごしていたプラチナは、気が付くと幽遊白書の世界へと転生していた。それも、幽助の双子の妹として。能力はヴァルキリープロファイルで、召喚できるのはハンターハンターの世界でエインフェリアにした団員達。幽遊白書の世界で雪姫となったプラチナは、旅団のみんなと思いのままに過ごし、魔界を手に入れる事ができるのか？！

プロローグ　　ハンターハンターから幽遊白書へ（前書き）

つたないお話ですが、よろしく願いします。

## プロローグ ハンターハンターから幽遊白書へ

皆さまはじめまして。

ハンターハンターの世界から、転生してきたプラチナこと、雪姫です。

どうやら今回は、幽遊白書の世界に生まれたみたいで、なんと幽助と双子で妹でした。

小学校の入学式の日、体育館の階段から落ちて頭を打って気を失ったらあの時の神様がいたんだ。

自分がプラチナだったことや、旅団のみんなと過ごした日のこと。神様の説明だと、能力に変更があるんだって。基本はヴァルキリーの能力が使えるけど、キャラの召喚は、ハンターハンターの世界でエインフェリアにした人なら召喚できるんみたい。

ハンターハンターの世界でエインフェリアにしたのは、初期メンバーの団員とヒソカ。一度に召喚できるのは、4人まで。今はまだ能力は使えなくて、幽助が死んで原作が始まったら使えるんだってさ。

……あと8年

ちょっとさびしいけど、頑張るよ。

幽助って不良？だったよね。今はそんな感じしないんだけど。

とりあえず、原作がはじまるまで基礎体力をつけながら過ごそうっしょ。

こうしてプラチナ改め、雪姫と旅団の新しい日々がはじまりまし

た。

雪姫は、幽助や螢子と遊びながら、運命の日を迎えるのを心待ちにするのでした。

## プロローグ ハンターハンターから幽遊白書へ（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

次回の予定は、いきなり中学生から始めようかと思っています。  
更新のペースはゆっくりですが、最終話まではたどり着く予定です。  
誤字脱字などがありましたら、ご指摘よろしくお願いいたします！

原作にそって話は進めて行きます。

感想お待ちしてま〜す？

第1話 幽助と水先案内人（前書き）

マンガを読みかえしてます。  
とまんないねえ〜

## 第1話 幽助と水先案内人

やっと中学二年生になりました。

もうすぐ原作がはじまり、旅団のみんなを召喚できるようになる。

温子ちゃんは全く家事ができないので、私がやっています。

雪姫が朝ごはんの用意をして、急いで学校に行く準備をしていると幽助が声をかけて来ました。

「おい、雪姫！ お前さつさと学校行かないと遅刻すんぞ」

「また幽助は行かないの？ 螢子ちゃんに言うからね」

「バカつ螢子に言うなよ、あいつ怒ると鬼になるんだからな」

「じゃあ、遅れても良いからちゃんと来なよね」

「へいへい」

「朝ごはん食べてよ、行ってきまーす」

「おう、気を付けるよ」

雪姫は鞆を持って、学校へと歩いてく。

途中で友達と合流して学校に着くと、すれ違うみんなが恐々と「お、おはよう姫様」と挨拶をしていく。雪姫が幽助と双子だという事は有名だが、雪姫の可愛さにファンクラブができあがり、兄の幽助が怖いが挨拶をしてくる人が多い。別に幽助がどうこうする事はないんだけど、勝手に怖がってるんだよね。

幽助にしたら、私の裏表の激しさの方が怖いらしいけどね。しっつれいしちゃうわ

ピンポンパンポーン



『浦飯幽助！！　すぐ指導室の竹中までこい！！』

おう、今日はちゃんと来てるんだ。

そんなに螢子ちゃんが怖いか？　尻にひかれてるねえ

「雪姫ちゃんのお兄ちゃん、呼ばれてるけどいいの？　ほっといてさ」

「大丈夫、だって螢子ちゃんが迎えに行ってると思うよ？」

「たしかに、螢子ちゃん行ってそうだよな」

「でしよう〜」

『浦飯！！　浦飯！！　至急、指導室にこい！！』

放送を聞きながら、雪姫は原作の始まりを感じていた・・・

幽助が久しぶりに登校してきた今日、雪姫の予想通り、幽助が子どもを助けて死んでいた。警察に話を聞いた雪姫は、病院へ向かい幽助の遺体を自宅に運んでもらえるように話しをつけ、葬式屋さんとお通夜の準備をはじめた。

幽助の胸に耳を当てて、心音が無いことを確かめる。

ほんとに死んでる。温子ちゃんはダメね、ぼーっとしちゃってるから。

お通夜がはじまり、ファンクラブの連中や先生、螢子ちゃんと友達が来てくれた。あとは、煩い桑原も来た。竹中先生は、ちよっぴり泣いてたみたいで、温子ちゃんもつられて泣いちゃったよ。

幽助が助けた子供も、母親と一緒にきたけど、幽助が死んだって事がまだよく分かんないみたい。

それにしても・・・視線を感じるね〜

雪姫は、視線を感じる方を向く。能力を取り戻しつつある雪姫には、幽助と水先案内人の姿がぼんやりと見る事ができた。二人の話までは聞き取れないけど、口の動きと表情からして、私が二人の方を向いている事に驚いているみたい。

「バカ幽助、螢子ちゃんを悲しませんなよ!」

「!!! 雪姫・・・」

「驚いた〜 えらく勘の鋭い子だねえ」

幽助に思うことを伝えた雪姫は、温子が泣いている家へと戻って行った。

雪姫を見送った幽助は、水先案内人に生き返るための試練を受ける決意を伝える。

水先案内人は了解をする。幽助をあの世へ連れて行き、閻魔様にご試練?の内容について説明をしてもらう必要があることを話した。

幽助は、水先案内人に連れられあの世へと飛んで行く。

飛んでいく二人を見る、雪姫がいた。

意味ありげに微笑む雪姫は、銀翼を出現させて空に浮かんでいる。

雪姫が取り戻した能力は、今のところ自分でレナスの力が使える事だけだった。旅団たちの召喚はまだできなかったが、幽助が生き返ることができればもっと能力を取り戻す事ができるはず。

みんなと再会できる。今度こそ、もっと長くの時をみんなと過ごすんだ。

そのために必要なのは、力！！ 力こそあれば、誰にも邪魔されず自由に生きれるから。

幽助が見えなくなると、雪姫はゆっくりと地上に降りていく。

歯車のずれた物語が、ゆっくりと進んでいく。

神たちが見守る雪姫にとって、何が待ち受けているのか。

第1話 幽助と水先案内人（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます！

次回の予定は、幽助が桑原の体で螢子に挨拶するところです。

ちょこちょこ頑張ります。

これからもよろしくです

第2話 最後の挨拶（前書き）

難しい・・・

## 第2話 最後の挨拶

はい、はじめまして。

水先案内人のぼたんちゃんです

幽助をコエンマ様に合わせるために、あの世の審判の門へ連れてきたんだよ。

試練の内容は？卵？を育てること。幽助の霊気を吸収して育つ卵。化け物が出てこないのを祈るばかりだよ、ほんとにね。

「幽助、お前の心臓はもう動きはじめているぞ」

「なに?! マジかよ!」

「せいぜい頑張ることだな」

「コエンマ様、後で少しよろしいですか?」

「よからう」

ぼたんは、コエンマに雪姫のことを報告した。

人間にしては勘が鋭すぎることに、何か不思議な力を感じることに。

コエンマは、父親の閻魔より神々が見守る女神候補について聞かされていた。だから、ぼたんが報告してきた人物が、女神候補だという事にすぐ気が付いた。ぼたんには、雪姫を生き返るための試練に関係させないように命令し、様子を見守ることを伝えた。

雪姫が自ら関わってくるようならば、邪魔立てをしないこと。敵になることは、ありえないだろうという考えも伝える。

コエンマと話が終わったぼたんは、幽助を連れて人間界へと戻って行った。

「おい、ぼたん。オレの心臓が動き始めた事を、生きれる奴に伝

える方法はあるのかよ!? 急がねえと、オレの体が火葬されちまうぞ!」

「方法はあるよ。 夢枕に立つのさ」

「そんじゃ、行くぞ」

「はいな」

幽助とぼたんはまず、母親の温子と妹の雪姫の様子を見に来た。すると・・・

「幽助のバカーーーーー」

「幽助のアホーーーー」

チンチンチーーーーン!!!

「なに勝手に死んでんだよあ」

「バカ幽助、バカ幽助、バカバカ幽助!!!!」

酔っぱらって暴れる母親と、一緒に笑いながら酒を飲む雪姫がいた。

そんな2人を見た幽助は、頭を抱える。

「こりやだめだ」

「なんでさ、もう少ししたら酔いつぶれるんじゃないかい?」

「こうなってるからが、長いんだよ。 あいつら、あんな感じで3日は飲み続けるんだぞ」

「あんたの妹もかい!?!」

「ああ、あいつは粹だ。 酔わねえんだよ、ずっとあのペースで飲むんだ」

「見かけによらないねえ」

「だろ!? おいつは表裏が激しいんだよ」

「はあ、それでどうするんだい？」

「しょうかねえ、螢子の夢枕に立つしかないか・・・」

幽助とぼたんが螢子の家へ向かったのを感じた雪姫は、温子の行動を見守った。

少しした後、温子は幽助を一発殴ろうと棺桶のふたをあけ、顔に赤みが差していることに驚いた。胸に顔をあてて心臓が動いていると、雪姫に興奮して話してきた。

雪姫は、温子と一緒に驚くふりをし、幽助をとりあえず布団に寝かせることに。

螢子がやってきて、温子から幽助の心臓が動いている事を聞き、二人で抱き合って泣きながら喜ぶ姿が見られた。

次の日、医者に幽助を診察してもらった。

寝ている状態で、いつ目が覚めてもおかしくないようだ。

螢子は、きのう幽助が来たのは夢だったんじゃないかと温子ちゃんに話している。

温子ちゃんは、自信を持ちなっつて励ましてたけど、あんまり効果なさそうだね。

さあ、幽助はどうするんだか・・・

「なんだよ螢子の奴、全然信じてねえーじゃんかよ」

「じゃあ、最後の挨拶は彼女にしておくかい？」

「最後のあいさつ？ やっぱオレは死ぬのかよ！！」

「そうじゃないよ、試練を受けている間は交信をしてはいけないっ



ていう、きまりがあるんだよ」

「きまりだ〜！？ 何でもっと早く言ねえんだよ！」

「悪かったよ（あんたみたいな奴、ギリギリでないとダメなんだよ）」

幽助は悩んだ結果、最後の挨拶は螢子にすることに決めた。

夢枕だと、また夢だったと勘違いされてしまうので、人の体をかりて話を直接することに。

「だれでもいいのか？」

「いいや、身近でいちばん靈感の鋭い人物って決まりがあるのさ」

「じゃあ、雪姫だな。あいつの勘はすごいぞ！」

「もうひとつ、同姓でないとダメなんだよ」

「・・・そんな奴いたか？」

「えーっと、こっちだよ！」

ぼたんが向かった先にいたのは、桑原だった。

幽助は意外だと驚いた。ぼたんに協力してもらい30分のリミットがある中、螢子に直接に話をするために桑原の体をかりて、走りだした。

螢子の家ほ店に行ったがおらず、街中を探してまわる。途中、雑魚に絡まれながらも螢子の友達と雪姫を発見した。声をかけると、螢子の友達は逃げて行ったが、雪姫だけは逃げずにのこっている。

「桑ちゃんどうしたの？ また喧嘩？ 弱いんだから程々にしときなよね」

「桑ちゃんだあー！？」

「どうしたのよ、いつものことじゃない」

「・・・ 螢子しらねえか（なんで桑原が雪姫と仲が良いんだよ、オレ知らねえーぞー！）」

「螢子ちゃんなら、あつちだよ幽助？」

「！！ お前、サンキユ」

「ふふふ」

雪姫はこつそり、幽助（桑原）の後を付いて行き、挨拶を聞いた。

あゝあ、螢子ちゃん泣いちゃった。気持ちはわかるけどね〜

さて、帰るかな。

桑原の体から抜けた幽助は、螢子に話のできたので満足しながら、帰っていく雪姫を見送る。

「幽助の妹の雪姫ちゃんってすごいんだねえ〜（さすが女神候補？）」

「ああ、でもなんであいつ桑原と仲がいいんだ!？」

「あたしや知らないよ」

「桑ちゃんだぞ！ 桑ちゃん！！ ありえねえ〜！！」

「お、落ち着きなよ幽助」

「落ち着いてられるか!!！ 雪姫〜！！！！！！」

「・・・ダメだこりゃ」

これから先を思いやられる、ぼたんだった。

どうなる幽助！ 無事に体に戻るのか!？

第2話 最後の挨拶（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回の予定は、桑原が勉強するところかな？と考えてます。  
これからもよろしくです。

第3話 男・桑原がんばる(前書き)

意外と、桑原すきなんだよねえ

### 第3話 男・桑原がんばる

おう、オレは幽助だ。

生き返る試練の為に、犬と子どもをなんとかしてやったり、女の幽霊を成仏させたり、じーさんとタヌキを見守ってやってるぜ。これが、なかなか大変なんだぜ？

久しぶりに螢子の様子を見にきたんだが、元気そうで良かったぜ。

幽助が螢子の様子を見て安心していると、桑原とその仲間が教師の明石に説教をされていた。

喧嘩をしたことに対する反省の色が見えないという事で、明石は大久保のアルバイト許可を今日限りで取り消しにすると言い出した。大久保が今回は見逃してくれと話したので、明石は約束を守るのならば取り消しをなしにしてもいいと言った。約束は、一週間喧嘩をしないこと。1人でもしたら連帯責任で、アルバイトの許可を取り消すことになった。

大久保は仲間に申し訳なさそうにしながらも、母親が病気で自分のアルバイトのお金で生活を工面していかねければならないと話し、協力を求めた。桑原は、自信満々に引き受け、一週間大人しくしていると約束した。

「あいつ、見かけによらず苦労してんだな」

「あんたも母子家庭だね、おふくろさんどこで働いてたんだい？」

「知らね、金バツジの奴から金まきあげてるのは見た事あるけどよ」

「へえー・・・」

幽助とぼたんが話してる間に、桑原は家へ戻っていく。その後を

明石つけて行く。

どうやら、喧嘩の現場を捕えようとしているらしい。幽助は桑原が喧嘩を我慢できるはずがないとぼたんに話していると、ちょうど桑原に喧嘩を吹っ掛ける不良グループが現われていた。

「よお桑原、こないだのかり返しにきたぜ。ツラあ貸せよ」

「・・・ ああ、いいぜ」

『ほらな!』

「けどオレは手エ出さねーかな、氣イ済むまで殴ったらとっとと帰れよ」

「な・・・ なんだと!」

『ありゃ?』

『ひゃー、かつこいいねエ』

「な、なんと・・・ あの桑原が・・・」

周囲が驚くなか、桑原は宣言したとおり一度も殴り返すことはなかった。

次の日、ボコボコの顔をした桑原がいた。

大久保達が声をかけていると、明石がやってきて、喧嘩を我慢している桑原達にさらなる条件をつけたした。それは、6日後の理科テストで全員が50点以上をとることだ。大久保達が前回のテストで何点だったか話し、桑原にも聞くと・・・ 7点

それを聞いた幽助は、笑い出した。

「あつはつはつはつは!! 7点だとよー」

「そういうあんたは何点だったのさ」

「12点だ! 理科は他の教科より、選択問題が多いからな!」

「へえ〜 (他の教科を聞くのがこわいよ)」

桑原は、大久保達に今から寝ずに勉強すれば大丈夫と言いきる。  
やる気満々の桑原。大久保達は、有言実行の桑原を心配そうに見  
送った。

数日後

徹夜に喧嘩でボコボコに殴られ、顔がまるで妖怪のようになった  
桑原がいた。

大久保達は、桑原の顔を見てもうやめようと話すが桑原は大丈夫  
と言ってきかず、ただ見送ることしかできなかった。

雪姫は、桑原が喧嘩をやめて勉強を頑張っていると噂で聞き、確  
かめにきていた。桑原の顔はボコボコで、歩きながら教科書を読ん  
でいる。

「桑ちゃん、桑ちゃん!!」

「なんでえ、雪姫じゃねエか。何かようか？」  
「勉強してるんだ？」

「おう、俺の仲間の為にちよつとな」

「ふん。見てあげようか？」

「へ!？」

「遠慮は良いよ、家においで!!」

「はあ!？」

「何？ 私の誘いを断るんじゃないでしょうね・・・ (黒い雰囲気  
気が漂う)」

「男、桑原！ 喜んで逝かせて頂きます!!」

桑原が雪姫に連れられて、浦飯家に入っていくのを幽助とぼたんが見ていた。

「いいのかい？ 幽助、桑原君が妹さんと二人つきりだよ？」

「ふつ、雪姫と勉強で二人つきりになるのはヤバイんだぜ。桑原は今頃……」

「今頃？ なんなのさあ」

「そんなに気になるんなら、お前ひとりで見てこい！」

「??？ そいじゃ、ちよいと見てくるよ」

ぼたんが浦飯家を覗くと……

「血液が赤い理由は？」

「え〜と、へ、へロモリン？ だったか？」

「ぶー、不正解！ へモグロビンでしょ？」

「あはは、そうでした」

2人の様子を見たぼたんは、普通に勉強しているようにしか見えず、幽助が何を言いたいのかわからず聞きに行こうかとしようとしたりその時。

「それじゃまず、左手の爪から剥いでく？ それとも右？」

「へ?!」

「どうしたの？ 大丈夫、安心して。爪を剥ぐのは慣れてるから？」

「ちよちよちよつっ!!! 次から！ 次間違えたらにしよう!」

「次から？ しょうがないなあ〜」

「ほっ、（よかったぜ）」



「次、間違えたら・・・ふふふ？」  
「!!!??」

雪姫から黒い雰囲気が漂っている。

そんな雪姫から離れたぼたんは、幽助に雪姫と桑原のことを話して聞かせた。

幽助は雪姫の表裏の激しさについて、実感できただろうと自信満々に言った。

それから雪姫との勉強会での桑原の頑張りを見た幽助は、桑原に喧嘩をしかけようとする奴らに、睨みをきかせたり、睡眠学習をてつだったりした。

テスト当日。

桑原は大久保に、50点は必ず越えたと自信満々に宣言する。

採点をしていた明石は、桑原が50点を超えていた事に驚き、点数を下げられないか考えていた。点数の配分を書いてしまったので、まだ○をつけていない回答を消しゴムで消し、桑原の点数を下げたのだった。その姿を竹中は不思議そうに見ていた。

テスト返却日。

「どういうことだ！ たしかに50点を超えていたはずだ!!」

「残念だったな、約束は約束だ」  
「くそっ」

桑原が答案用紙を見なおしていると、最後に書いたはずの答えが消されている事にきがついた。あまりの理不尽さに桑原が明石を殴ろうとした時、霊体の幽助が止めに入った。桑原は思いとどまり、一部始終を見ていた竹中が不正をした明石に、テストの点を元に戻すように指示をした。

桑原が大久保達に何と話せばいいのか悩んでいると、大久保達がやってきた。

大久保は泣いて喜び、桑原に感謝していた。なぜこうなったのか不思議そうにしていた桑原は、気にしない事にした。

「・・・サンキユ」  
『おっ』

幽助がいる方を向いた桑原は、礼を言って大久保らのところへと戻っていく。

「あいつ、俺が見えてんのか？」

「それはないよ、気配は感じると思うけどね」

「そっか・・・」

めでたし、めでたし

と思うでしょ？ 違っただなあ。

後日、明石は夜になると爪を一枚ずつ剥がされたり、校内を歩い

ていると悪寒を感じ事故によく合うようになったらしい。それを楽しそうに観察する、雪姫がいたらしい・・・

ふふふ？ ゴミは元気だなあー？

**第3話 男・桑原がんばる（後書き）**

ありがとうございました。

誤字脱字に気付いた方は、ぜひお知らせください。

次回の予定は、束の間の復活かな。

第4話 ちよこつと復活(前書き)

先がながい・・・  
はやく幻海さんのところへ行きたいです。

## 第4話 ちょこつと復活

どうも〜 ぼたんちゃんです

なんと、幽助が体に戻れることになったのさ！！

そのかわり、一日だけなんだけどねー

「おい、ぼたんどういうことだよ。体に戻れるってーのはよ」

「簡単だよ。あんまり長い間、魂と体が離れたまんまだと仮死状態に近い体の方が、本当に死んじまうってことさ。そこで、一か月に一度は体に魂を入れて、生気を充電させる必要があるのさ」

「オレが電池みたいなもんか」

「そういうこと」

「よし、さっそく行くか！」

「ちょい待ち！！ おふくろさんに妹さん、螢子ちゃんと話しちゃダメだよ！ 霊界の掟は厳しいからね！ 約束やぶったら体にはもう戻れないからね・・・ もし話したら、体に戻れず電池が切れてあっさり死んじまうってことだからね」

「分かったよ！」

こうして、幽助は一時的に体に戻ることになったのだった。

雪姫が学校に登校した後に、幽助は体に戻り目を覚ました。

パジャマから、私服に着替えた幽助は、さっそく街にくり出して行く。通行人とぶつかれることに喜び、変人に見られている幽助は、絡んできた不良をちょこつと締め上げるだけにし、シャバの空気を満喫することに。

幽助の行動を見ていたぼたんは、  
「どーかあと23時間、とんでもないことをしませんように!!」  
と祈っていた。

そのころ、雪姫は螢子と友達と一緒に下校していた。  
友達の一人が、話題になっている歌の途中に？せんぱい？って聞  
こえるところがあると熱弁しながら歩いていると、不良と肩がぶつ  
かったのだ。不良は、ぶつかってきた螢子の友達を突き飛ばし、い  
ちやもんをつけたのだ。雪姫は見るだけで何もせず、螢子が友達  
と不良との間に入っていく。

不良の1人は、不埒な事をしようとして螢子の強烈ビンタの餌食  
となった。

そんな雪姫と螢子に気が付いたのは、桑原の友達3人組だ。

「お、ありや・・・うちの学コの女のコじゃねーか」  
「おい、しかもあれ浦飯の妹じゃね？」  
「マジかよ・・・とりあえず、止めた方がいいよな」  
「そうだな」

桑原の友達3人組が乱入し、雪姫と螢子らに行くように伝えた時、  
顔で大ちゃんが登場した。

大ちゃんは3人をあつとう言う間にボコボコにし、螢子の顔を見  
て連れて行くことに決める。雪姫は、気配を隠し、ただただ脅され  
て連れられて行く螢子を見送った。

私が倒しちゃったら面白くないよねえ！

それにしても、桑ちゃんの友達って弱すぎじゃない？

大ちゃんって人もさ、やるならやるで徹底的に痛めつけろっての

!!

中途半端って嫌ー！

しばらくして、桑原がやって来た。

状況を聞いた桑原は、一人で累中のたまり場？スナック半殺し？に乗り込むことにした。

桑原が準備の為に歩いて行くのを見送った雪姫は、近くで盗み聞きしている幽助に向かって、

「お面でもかぶって、早く行った方がいいよー」

と話しかけた。幽助が動く気配を感じた雪姫は、螢子の友達と家に帰ることに。

？スナック半殺し？に乗り込んだ幽助は、全員をぶちのめし、無事に螢子を取り戻すことができた。店を出たところで桑原に会い、今の自分の状況について説明する。螢子を助けたのは桑原ということにし、家に螢子を連れてもどる。家には雪姫がいたが、アイコンタクトで螢子をあずけ、幽助は螢子が目を覚ますまでは寝たふりをすることにした。

幽助が本当に寝始めてすぐに螢子は目を覚ます。夕又キ寝入りをしていたようだ。

「雪姫ちゃん、幽助がね助けにきてくれたのよ」

「へえ〜 そりゃよかったじゃん」

「・・・うん、元気そうでちよつと安心した」

「幽助、寝てるよ。見て帰るでしょ？」

「ありがとう、雪姫ちゃん」

「どういたしまして？」



螢子ちゃんが帰った後、幽助の顔を見に行くと、ほっぺたにキスマークが書いてあった。

ふふふふ・・・ 仕上げにこれが必要でしょ

クリリンにしようか、ドラゴンの紋章にしようか、剣心にしようか悩んだんだよねえー

雪姫が、デカデカと額に書いたのは 『肉』

約束の一日が過ぎてから幽助は目を覚ました。

「ん・・・んん!? おれ霊体に戻っちまったのか!?!」

「おや、目が覚めたんだね。久しぶりに体を動かしたからね、疲れてたんだよ。それより、自分の顔を見てごらんよ。面白い事になってるよ」

「おれの顔がなんだよ・・・って! 螢子のやるータヌキ寝入りしてやがったな!?!」

「それにしても、幽助の妹は容赦ないねえ」

「確かに、こんなにでかく書かなくてもいいじゃねえーかよおおお  
おー！ー！ー！」

幽助の叫びは、夕焼けの空にむなしく響くのだった・・・

## 第4話 ちよこつと復活（後書き）

お疲れ様ですー

次回の予定は、ちやちやつと完全復活まで・・・いけるかな？

いつもありがとうございます！

これからも、よろしくお願いしますー

## 第5話 幽助復活そして雪姫も

ども〜 雪姫です。 めっちゃお久しぶりです。  
昨日、螢子ちゃんが幽助にチューをかまして無事に復活しましたよ。

いや〜あの夢を見せられた時は寒気が・・・

兄妹でチューはないわ、桑ちゃんも夢見たらしいけど想像するだけでもキモイわ！！ それとも秘かに幽助は、桑ちゃんにチューしてもらいたかったとか・・・！？ そんな！ 神様が許しても、ビジュアル的にこの雪姫が許しません！

幽助が茨の道を進まず、螢子ちゃんとくつつくように調教しななさなくては。

復活した幽助だけど、朝からどっかに出かけてます。 何処に行っただかね？

とりあえず、今日は温子ちゃんと幽助がまた学校に通えるように、校長先生にお願いしに行くんだ。 もうそろそろ約束の時間なんだけど、温子ちゃんが来ない・・・ 友達を呼んでくるって言ってたけど、どんな友達を呼んだんだか。

温子の友達は、皆仲良く黒塗りのベンツで登場。

校長先生は心安く、幽助が登校する事を許してくれました。 温子ちゃんとその友達が可愛くお願いしたからかな。 それはもう嬉し泣きをしながら、笑って許してくれて良かった。 許してくれなきや、家族に一人ひとり事故ってもらっ予定だったからね。

「残念？」

今日から、幽助も学校へ。

授業を相変わらずサボり、同級生の荷物が無くなったのでやったのかと疑われていた。幽助が職員室で話を聞かれている時、雪姫もちょうど進路について担任に呼び出されていた。

「浦飯、お前の仕業だろう！」

「オレじゃねーって言ってんだろ」

職員室で怒鳴り合わないでほしんだけど？

「貴様という奴は親子そろってどうしようもない悪だ！」

「なんだと！？ てめえっつー！！！」

幽助が先生の後ろを見て驚き、固まった。他の人には見えていないようだが、小人が急に現れ幽助に話しかけている。内容は、盗賊に宝を盗まれたので取り戻すように命令しているようだ。

コエンマね・・・ 霊界探偵の仕事って事は、剛鬼・蔵馬・飛影が盗んだんだよね、確か。

だいたい覚えてんだけど、細かいところまではね？

雪姫が原作を思い出している間に、先生のポケットから幽助が盗んだとされていた物の一つが出てきた。幽助の疑いがはれ、先生が逃げるように職員室から出て行き、幽助が後を追う。雪姫も後を追って職員室を出ると、先生の後頭部に、幽助の指先から出た霊気の塊がぶつかった。

おおー！！ 先生が面白い感じで吹っ飛んだよ！？

コエンマの説明によると、あれが霊丸か。もうちょい威力があれば文句ないんだけどね

それにしても、一日一発ってしょぼすぎ・・・

雪姫が霊丸について考えている姿を、コエンマが観察していた。

ぼたんの報告通り、神に愛されてるだけあって恐ろしいほどの靈力を感じるな。幽助にとったら今回の敵は強敵だか、あの妹にすれば雑魚じやの。手伝わてもらえれば安心なんだが、ダメもとで頼んでみるか？

こうして、雪姫も盗賊を捕まえる手助けをすることに。

報酬は、これから先、雪姫がすることに対して口出しをしないこと。何をしても止めないこと。

コエンマは、雪姫が神に愛されていることから、悪い事はしないだろうと思い応じた。雪姫の目的も知らず・・・ここから雪姫が本格的に動き始める。

雪姫は、幽助が完全復活したことにより、1人だけ召喚できるようになった。

この日から、浦飯家にはやたらと賢い黒猫が住みはじめた。

第5話 幽助復活そして雪姫も（後書き）

お久しぶりでございます。

誤字脱字があれば、ご指摘よろしくお願いいたします！

## 第6話 盗賊と雪姫+団長

幽助はコエンマから、盗賊を捕まえるのに雪姫も共に行く事を知らされていた。

「雪姫を連れてけえ〜!?!」

「そうだ、2人で盗賊を捕まえてもらおう」

「あぶねえーだろうか!」

「幽助お主には気の毒だがの、雪姫はお主よりも強いぞ?」

「確かに、オレは雪姫に勝ったためしがねえけどよ、妖怪が相手なんだぞ!?!」

「問題ない、期限は一週間じゃ」

「マジかよ・・・」

「本気とかいて、文字と読む!」

「はあ〜、分かったよ」

雪姫と幽助は合流し、2人で盗賊を退治する為に街の中を歩く。

「なあ、雪姫その黒猫もつれてくのかよ?」

「もちろん。黒猫のクーちゃんだよ」

「にやうあ (よろしく〜)」

「よろしくな、クー」

「あつ、幽助あれじゃない?」

「ん?」

黒髪を逆立てた子どもに、長髪の優男、ゴリラがいた。

風が吹こうと、崩れる事のないあの逆立った髪型。

どうやってキープしてるんだろ? ケープでもつけてんのかな?

雪姫が考えていると、3人組は路地裏に入っていく。  
幽助と雪姫も後を付いて行くと、人気のない林に出た。

3人組の様子を見てみると、どうやら長髪の男が蔵馬で、黒髪逆立て男の子が飛影、ゴリラが剛鬼らしい。話を盗み聞きしていると、蔵馬が抜けたがっているようだ。

どうなるのか様子を見ようとしていたら、幽助が3人に話しかけて行っただ。

なんでやねん!! 敵の情報を集めようよ!!

幽助が出て行ったことで、蔵馬と飛影は何処かに消えた。  
残ったのは、ゴリラの剛鬼だけ。

「手を貸そうか? お兄ちゃん?」

「大丈夫だ! 雪姫は見とけ」

「がんばってね」

「にやうあ (がんばれ)」

結果発表! 幽助ボロクソ負け!!

「にや〜 (弱すぎ)」

「勝負になってないじゃん」

それにしても、剛鬼? の笑ってキモすぎ・・・ 勘に触るし



「へっへっへ 次はお前だ」  
「自分の立場を分かるうね？」

他に人の気配もないし、ちよつと遊んであげようかな？

「こねえなら、その魂食つちまうぞ！」

「誰が話しかけていいって言った？ 『ヴァルキリー』」

「あゝあゝ！？ 何だその本は」

さあ、ちよつとは頑張つてよねえ

『ヴァルキリー』を出した雪姫は、あまりにも弱いゴリラの為に  
一時的に攻撃力がアップする？マイトポーション？を使ってやる。

「なんだあ！？ 力が湧いてくるぞ！！」

「はいはい、よかったねー」

「泣きわめけエーーーーー」

あらら、バカがつつこんできたよ。

剛鬼の動きを見た雪姫は、小手調べに晶石を撃った。

「なんだ？」

「考えてる暇があれば、避けないとねえ

ホラホラホラホラ！！

！」

体が大きすぎて、動きが鈍いな？

右に撃ては左へ、左に撃てば右に、目の前に撃てば後ろに・・・  
こいつ踊ってんのか？

「ちょっと、ゴリラさん。私はじめの位置から動いてないんですけど?」

「ぐぐぐぐぐぐ……」

「弱すぎ、弱すぎる事は罪なのよ!」

「がああああああー!」

「あつという間に、晶石像の出来上がり? 弱すぎて話しになんないね? これに負ける幽助ってどうよ……」

像に近づき、中でまだ生きているゴリラに話しかける。

「あんた、出たい? 出たいよねえ、出してあげてもいいよ。

ただし、条件があるの」

幽助を指さして、雪姫はある提案をする。

「明日、もう一度あそこで倒れてるバカと戦って、勝てたら見逃してあげてもいいよ?」

「……」

「返事しなよ? いま殺してもいいんだからね」

「ワカツタ……」

「そ、じゃあよろしくね。私達が家に着いたら晶石といたげる」

幽助を運ぼうと肩を貸したが、意外と重くて断念。『ヴァルキリー』からクロコを召喚。今の世界の条項を説明するついでに、幽助を家まで運んでもらった。途中で水先案内人? ぼたん? という霊界探偵の助手が来たが、大丈夫と伝えて帰ってもらうことにした。

家に到着、幽助をベッドに寝かせて、私の部屋で今後の事を話し合うことに。

「かくかく しかじかで こういうことなの」

「プラチナ、面倒だからとその説明はどうかと思うぞ」

「だってー」

「これからはどうするんだ？」

「とりあえず、なるべく原作通りに進めてみようかと思ってる」

「そうか・・・ 召喚は最大で何人できる？」

「今は1人だけ、前と一緒に最大3人かな？」

「わかった」

「普段はクーちゃんでもいい？ さすがに人を出すのはねえ」

「確かにそうだな、何かあれば適材適所で召喚すればいい」

「はい」

「だが、俺はもう荷物運びはしないからな。 次はないぞ」

「了解です！！ もうしません！！」

「・・・ 順番に団員へ挨拶はしろ、状況の説明はしておいてやるから」

「ありがとう！！ んじゃ、またね」

「ああ、怪我をするなよ」

団長のクロコを送還してから、雪姫は1人ずつ久しぶりの再会を楽しんだ。 名前が変わったが、団員達は相変わらず？プラチナ？と呼んでもらうことに。

最後に召喚したヒソカを送還して、クーちゃんを召喚。

今日は疲れた〜 クーちゃんと寝るって懐かしい。 落ち着くなあ〜

明日の幽助とゴリラの勝負をすっかり忘れていた雪姫は、勝負には立ち会わず、原作通りにぼたんにもらった霊界グッズを上手く使い自力で幽助は勝つたらしい。

勝負の様子をぼたんから聞いた雪姫は、ゴリラが捕まったことを残念に思った。

あゝあ、ゴリラで拷問ごっこして遊ぼうと思ったのに――――  
残念？

## 第6話 盗賊と雪姫＋団長（後書き）

闘うシーン、無理でした。

今回はムダな抵抗をせずに、撤退をしました。

がしかし！ いつかは戦闘シーンを書けるように頑張ります！！

読んでいただき、ありがとうございます。

誤字脱字などがありましたら、ご指摘よろしくお願い致します。

## 第7話 暗黒鏡と蔵馬×幽助！？

剛鬼を捕まえ、宝を一つ取り返す事ができた幽助と雪姫。  
残すところ、あと二つの宝を取り返す必要がある。

幽助に任せておけば大丈夫だろうと思いながらも、本当に大丈夫かと心配になる雪姫。あまり自分が介入しすぎると、予測が難しくなるのであるべく原作通りに進んでほしい。

そんな事を考えながら、雪姫が校門を出ると、クーが門の上で待っていた。

「にゃ〜（プラチナ〜）」

「クーちゃん、お迎えありがとう」

「にゃにゃにゃうにゃ（幽助と蔵馬が2人で歩いてったよ）」

「よかった、原作通りね。大丈夫だとは思うけど、様子は見守っておこうかな。クーちゃん場所の特定は大丈夫だね？」

「にゃ！（ばっちし!）」

「それじゃ、見学しに行きましょう」

クーちゃんを肩に乗つけて、蔵馬と幽助の元へ向かう。

たどり着いた場所は病院。

蔵馬と幽助の姿を確認した雪姫は、別館の屋上から2人の様子を見ている。どうやら入院しているのは、蔵馬の母親で間違いなかった。

幽助を自分の母親に紹介した蔵馬は、屋上へと移動してきた。

「あ！なんで雪姫がここにいるんだよ」

「君の彼女かい？」

「妹だよ（です）」

「それはすまなかった。君も一緒に聞いてほしい」

「聞くだけね」

蔵馬は、幽助と雪姫に自分の生い立ちを話す。

話を聞く限り、蔵馬は原作通りに母親の病気を鏡を使ってなおす事が目的のようだ。

幽助が、どうして自分にそんな話をしてくれたのかを聞いた。蔵馬の返事は、君を信じているから。ここだけの会話を聞いたらBしな雰囲気が・・・

雪姫が考え事をしてしていると、蔵馬のお母さんの容体が急変したと知らせがきた。急いで病室に戻っていく2人を雪姫は見送る。

蔵馬は願いをかなえるに必要な物、自分の命と引き換えにしなければならぬ事を知っていた。

「自分の命と引き換えに大切な人を助ける、か・・・。私には出  
来ないなね。 エインフェリアになってもらえばいいだけだし、わ  
ざわざ命かけなくても一緒にいれるもん。ね、クーちゃん」  
「にゃう！（たしかに！）」

雪姫がクーと話していると、2人が戻って来た。

「この鏡を使うのは、今しかない！」

「お前、知ってるのかよ!? 願いをかなえるにはある物を捧げないといけないんだろ!？」

「知っている、それは命さ」

「命ってお前、それでいいのかよ！」

「止めないでくれ！ 暗黒鏡よ月の光を受けて目覚めたまえ、その面に私の願いを映し力を示したまえ」

『・・・この女の幸福な人生、お前の願いに間違いはないか・・・』

「ああ」

「おい！ お前、間違ってるぞ！ 彼女が助かったって、お前が死んだら意味がねエーだろ！！」

「今まで彼女を騙してきた、恩返しなんだ！ 止めないでくれ！」

『自分の命と引き換えに、他人の幸福を願うというのか！？』

「そうだ、それが私の願いだ！」

「おい！ そんなんで彼女が喜ぶと思ってるのかよ！」

「オレの邪魔をするな！」

「なんだと、人が心配してんのに！」

『願いをかなえよう』

「クソ鏡！！ 勝手に進めてんじゃねえー！！！」

『え、かなえちゃだめなのか？』

「ダメに決まってるんだろ！！！」

「勝手に決めるな、暗黒鏡よ！ 願いをかなえてくれ！」

「ダメだ！」

「かなえてくれ！」

「かなえてみる、ぶっ壊すからな！！！」

「なっ、邪魔をしないでくれ！！！」



「うるせえー」

『…………… どうすればよいのだ？』

うわあー、カオス

ていうか暗黒鏡が困ってるってどうよ？

このまま見てるのも面白いけど、早くしないと蔵馬のお母さん死んじゃうんですけど。 しょうがない、ここはひとつ蔵馬に恩を売るのもいいかもね。 なんてたって、魔界で有名な盗賊だったらしいし？ 後々、役にたってもらいましょうか。

雪姫が気配を消して2人に近づき、至近距離で言い合っているそれぞれの後頭部に手を添え、気付かれる前に一気に力を込めて押した。

ぶっちゅ〜

『…………… 大丈夫か？』

暗黒鏡が心配げに2人に声をかけるが、硬直が解けずにお互いの唇がくっついたままのふたり。 目を見開き、点になっている。 雪姫は手を離し、2人から少し離れて声をかける。

「そんな！ お兄ちゃんにそんな趣味があっただなんて！！ 大丈夫、お兄ちゃんがどんな人を好きになっても雪姫だけはずっと味方だからね、頑張って、応援するよ！！」

『…………… もしや、本当の願いはコレなのか！？』

「そうだったの！？ 命をかけるほど愛し合ってるだなんて…………

そんな思いつめる前に気付いてあげればよかったね、ごめんねお兄ちゃん」

『少年よ、諦めるでないぞ。愛し合っていれば越えられない障害などないぞ!』

「そつよ! 諦めないでお兄ちゃん・お義兄さん?」

ユラリと、幽助と蔵馬が顔を下に向けたまま立ち上がり、雪姫に向き直る。

「「何しやがる! (何をするんですか!) 誰と誰が愛し合ってるつて!?!?!?」」

「お兄ちゃんとお・義・兄・さん?」  
『ぬしら2人じゃの』

「「ふざけんじゃねー! (ふざけないでください!!)」」  
顔を真っ赤にして、肩で息をしながら全力で言い返すふたり。

このふたり面白い!! それにしても、暗黒鏡ってノリがめっちゃよすぎでビツクリ。さすがにそろそろ冗談は程々にしないと、マジでキレられそう。真面目に話をしますか。

「冗談はコレぐらいにして、私から貴方に提案があるわ」  
『なんと! 冗談じゃったのか!?!』

「「.....」」 (殺気が漂う) 「「.....」」

暗黒鏡が天然だったとは・・・

「ここからは真面目な話よ、誰も死なずに彼女を助ける方法があるわ」

蔵馬が真面目な顔つきになり、右手の甲で唇を拭い、雪姫の話を聞く態勢になる。幽助は蔵馬の斜め後ろに下がり、様子を伺う。

雰囲気が真面目になったのを確認し、雪姫は蔵馬へ向かって交渉をはじめめる。

「そのかわり、私のお願いを聞いてほしいの」

「本当に助けられるのか、私が知る薬草は全て試したが効果は見られなかったのだが？」

「心配しないで必ず治せるから。それで願いを聞いてくれるの？」

「母さんが回復するのを確認してからならば、聞こう」

「それでいいわ、それじゃコレを病室の部屋でブチまけてちょうだい」

「ブチまけるって、それで大丈夫なのか？」

「大丈夫」

雪姫はあらかじめ出していた薬の小瓶ノイブル・バニッシュを蔵馬に手渡した。

「《ノイブル・バニッシュ》状態異常を回復させる薬よ、私の特性だけだね。あなたのお母さん、身体が病気により異常をきたしてるんでしょ？ 体力回復よりはこっちの薬だと思うのよ、ただの回復だと病気まで活性化しちゃダメでしょ」

「病気による異常・・・すぐに試してみるよ」

幽助と雪姫は、蔵馬が薬をもって病室に急いで戻って行くのを見送った。

『我はどうすればいいのだ？』

「お前は何にもしなくていいんじゃないかねえーか？」

『ふっ、役立たずが二人か・・・』

「俺もかよ!？」

「ちよつとなにジャレてんのよ、蔵馬が薬を使うところ見ときなさい  
」!

雪姫が幽助と暗黒用にむかつて注意し、蔵馬と母親の様子を見るように促す。

『お前のせいじゃ、怒られたではないか』

「うるせえ、見に行くぞ」

幽助が暗黒鏡を持ち、病室が見える位置に移動する。すると蔵馬が病室に入り、薬の栓を開けて部屋全体にブチまけると、病室にいる全員の足もとに魔法陣が出現し、銀色の光が一人ひとりを包んでいく。蔵馬以外は誰も魔法陣には気が付いていない。銀色の光が納まり、魔法陣も消えると、苦しそうに死にかけていた蔵馬の母親の様子が一変し、呼吸が穏やかになり軌跡の回復をみせた。医者が驚くなか、蔵馬と母親は手を握り、涙を浮かべて喜んでいようすが見られた。

「ちゃんと効いたみたいね、よかった」

「マジかよ・・・雪姫、お前ってスゴいな!! さすが俺の妹だ!! わっはっはっはっは」

幽助って、靈感なさすぎ・・・何を聞かれるのかドキッとして損した!

雪姫が呆れたまなざしで幽助を見ていると、幽助が持っている暗黒鏡がボソツと言ったのが聞こえてきた。

『こやつ、バカじやの』

「にゃ〜（ばか〜）」

鏡にバカって判定されてるよ。クーちゃんは幽助より賢いから当たり前のごとく言ってるし・・・

とりあえず、暗黒鏡も無事に取り返すことができたし、蔵馬に貸しが一つ出来てよかった、よかった。次は最後のお宝、？降魔の剣？を飛影から取り返せば任務完了になる。あともうひと頑張りかな。

喜び合う病室を見届けた幽助と雪姫＋クーは、暗黒鏡をもって自宅へと帰って行った。

第7話 暗黒鏡と蔵馬×幽助!? (後書き)

暗黒鏡がおちやめさんになってしまった。

## 第8話 飛影と降魔の剣

雪姫と幽助、霊界探偵助手のぼたんを含めて3人は、学校の屋上で作戦会議中です。

期限はあと3日。

飛影から？降魔の剣？を取り返さないとダメなんだけど、どうするんだろうね。

居場所が分からないから、飛影が動くのを待つしかないかな。

幽助はぼたんさんに、剛鬼にやられた怪我の治療をしてもらって回復しました。

ぼたんさんは、心霊医術の心得があるんだってさ。どれくらいすごいのかはよく分かんないけどね。

「やっぱりここにいた！ まだ宿題のテキスト提出してないの幽助だけよ！！」

「げっ、それどころじゃねえーんだよ」

「あはは、兼業探偵はつらいねエ」

「ぼたんさん、余計なこと言わないの」

「そうさね、それじゃ幽助と雪姫ちゃん後でね」

ぼたんが屋上から出ていき、螢子は不思議そうな顔をして見送っている。

「幽助、今のぼたんさん？　ってどういう知り合いなの？」

「ぼたんとは何でもないぞ?!　話せば長くなるんだよ」

「ふうん、長くなるんだ・・・」

螢子ちゃんのオーラが怖いです。　ドス黒いのが渦巻いてます!!

「螢子ちゃん、幽助呼びにきたんじゃないの？」

「そうだった！　幽助、竹中先生カンカンよ、早く職員室行きなさい!!」

「マジかよー」

「宿題サボった幽助が悪いね」

「雪姫ちゃん幽助を職員室まで送ったら、一緒に帰れる?」

「大丈夫、一緒に帰ろうね」

「痛ででで、螢子！　耳ひっぱんな!!」

「それじゃ、さっさと歩きなさい」

螢子が幽助の耳をひっぱり逃がさないようにして、3人で職員室に向かった。



幽助を竹中先生に引き渡し、雪姫と螢子は一緒に下校する。

「ねえ、雪姫ちゃんはぼたんさんのこと知ってる？」

「知ってる」

「幽助とどんな関係？」

「（ニヤリ）・・・ 気になるんだ」

「べべべ別に、変な意味じゃないんだから！」

「どんな意味なのかな？」

「もう！ 雪姫ちゃんからかったでしょ！！」

「えへへへ」

螢子と話していると、クーが雪姫の足もとにやってきて鳴いた。

「どうしたの、クーちゃん」

「にゃ〜にゃん （きをつけて、変な人きたよ）」

「ん、そうだね」

「雪姫ちゃんとのこのクーちゃんって、賢そうよね。 幽助と大違い」

「にゃんにゃん （幽助はバカなの〜）」

「そつでしょ」

雪姫がクーを抱き上げると、螢子がクーの頭をなでなで。立ちどまって、クーをなでなでしていると、黒髪トサカちびがやってきた。

「おい」

飛影つて、思ったよりも背が低いのね。

「おい！」

ていうか、降魔の剣と足の長さが一緒って……ちょっと？ かなり？ 可愛いそう

「おい、貴様！！」

牛乳飲ませたら、今からでも背が伸びるのかな？

「オレをそんな目で見るんじゃねエ！！」

「にゃ〜ん（あきらめないで）」

「その猫！ お前もだ！！」

「ぼく、どうしたの？ 迷子かな？」

「えっ、雪姫ちゃんこの子、迷子なの？！ 大変、お母さんとはぐれちゃったの？ 大丈夫よ、お姉さん達が一緒に探してあげるから、泣かないで」

「違う!」

「違うの?」

とまどつ螢子の腕をひっぱり、雪姫は螢子の耳にささやいた。

(螢子ちゃん、きっと恥ずかしいのよ。男の子だから、自分が迷子だって認めたくないんじゃないのかな?)

(そうね、おとこの子だもんね)

螢子は気をとりなおして、ことさら優しく声をかける。

「大丈夫よ、迷子じゃないのよね」

「そうだ、お前達にようがある。一緒についてきてもらおうか」

「うん、行きましょうね」

「.....」

「お姉さんね、雪村 螢子っていうのよ。ほくお名前は?」

「.....」

「木刀、危ないから持とうか?」

「うがああああああ!」 黙ってついてこい!」

飛影が螢子ちゃんにタジタジ・・・あれ？ 飛影ってこんな感じだったっけ？ 原作だと確か、螢子ちゃんって？降魔の剣？で額を切られて、連れ去られるはずじゃ・・・まいつか、螢子ちゃんが無事ならね

母性全開の螢子にペースを握られたまま、飛影はアジトに2人を連れて行き、使い魔へ浦飯に宝を持って来るように命令をしていた。

飛影の使い魔からの伝言を聞いた幽助は、ぼたんと一緒に宝を持ち急いでアジトにやってきた。

「飛影！ 雪姫と螢子を返せ！！ 約束の宝を持ってきたぞ！！」

「そうか、ならそれを渡してもらおうか」

「雪姫と螢子はどこだよ！」

「あいつら二人なら、無事だ。 というより、貴様の妹は何なんだ？！ オレを憐れむような目で見るわ、人を迷子だと言っわ、人質のくせに菓子を要求するわ、応じなければオレの部下を晶石漬にするわ、いったい何なんだよ？！ どういう教育をしてるんだ！！」

「・・・・・・・・ それはすまなかつた」

「さっさと宝をよこせ！！」

「それとこれは別だ、雪姫と螢子をここに連れてこい！」

「ならば、貴様を殺して奪うのみだ。オレに逆らった事を後悔するがいい」

「かかってこい！」

幽助と飛影の闘いがはじまった。飛影が優勢であったが、蔵馬の乱入があり何とか幽助の勝利で終わった。

幽助と飛影が闘っていた時、雪姫と螢子はどうと・・・

「ちょっと、この紅茶不味いじゃない。入れなおしてちょうだい」

「そうね、雪姫ちゃんの言う通りね。いくらなんでもこれじゃ、ペットボトルの方が美味しいわね」

「は、はい！」

飛影が残して行った使い魔を、こき使って優雅に過ごしていた。

## 第8話 飛影と降魔の剣（後書き）

ダメだ・・・駄文すぎるよー！

一度保存ミスして、消えてからは調子が戻りません。

更新ペースが亀になってますが、完結までは必ず行きますので  
お待ちくださいです！！

それでは～～

第9話 幻海師範と団長（前書き）

幻海師範の口調が・・・

第9話 幻海師範と団長

お久しぶりー みなさん元気でしょうか？  
暑さにめっぽう弱い、雪姫ですよー。

いやー それにしても昨日は、よかった、よかった！

本当に幽助がちゃんと飛影を倒せてよかった。幽助がダメそうなら助けてあげる気ではいたんだけど、めんどくさいじゃん？ 今回は螢子ちゃんとお茶飲んでる間に終わったから、ちょっとは幽助も強くなってる証拠かな。

「『ヴァルキリー』・・・！！！！！！」

「にやう？ (どうしたの?)」

雪姫が部屋のベッドに座って、『ヴァルキリー』を出して固まっているとクーが話しかけてきた。クーを抱き上げて『ヴァルキリー』が見えやすいように、自分の膝にのせてあげて嬉しそうな声で雪姫はクーに話しかける。

「ほら、クーちゃんココを見て！！ 2人ってなってる!!」

「にや (2人だね)」

「コレはね、召喚できる人数なんだよ。 2人ってことは、クーちゃんの他にもう1人召喚できるってこと！！ 誰を召喚しようかなあ」

誰が良いかな？！ やっぱりここは？お父さん？位置のクロロだよねー！！

「クーちゃん、クロロ召喚するね」



「にやにや!!! (はやく、はやく!!!)」  
「それじゃ、? 死の、先を逝く者たちよ?」

雪姫の背中に現れた銀翼から、光の粒が溢れる。やがて光の粒が人の形をかたどっていき、光が納まると、クロロが本を読んでいる姿勢のまま召喚された。

「クロローーー」  
「にゃうにゃう」

本を読み続けるクロロの背中に雪姫が、足にはクーが抱きついた。

「プラチナにクーか、..... 増えたのか」

抱きついてきたプラチナとクーを見て、クロロは状況を把握していた。

「クロロだ、本物のクロロの匂いがするよー　クンカクンカ  
ハアハアハア」  
「! キモイっわ!」

クロロの背中に鼻をくつつけて、匂いを嗅ぎまぐる雪姫。あまりのキモさ加減にクロロは耐えきれず、首を掴んでベットの上へ放り投げた。

放り投げられた雪姫は、顔からベッドに突っ込みながらも、すばやく態勢を立て直した。

「ひどい、クーちゃんも匂い嗅いでるのに何で私だけ?!」  
「お前から変態の香りがしたからな。それより、俺を呼び出した

という事は、面白い本があるんだろうな？」

家に面白い本なんて……………コレじゃだめかな？

雪姫は学校の図書館から貸りてきていた本をさし出した。

「源氏物語……………」

雪姫から本を受け取ったクロロは、本を読みはじめた。  
部屋には、クロロが本をめくる音が静かに響く。

ペラリ ペラリ

よかった、読んでるってことは合格なのかな。

雪姫がクロロの様子をうかがっていると、本が飛んできて額に直撃した。

「いだあああああああ！！！！！！」

痛い、痛い、めっちゃめっちゃ痛いです！

転がる雪姫に近づき、クロロは足で背中を踏みつけた。「ぐえあ！」カエルのごとき声を出す雪姫を冷めた目で見下ろしながら話しかける。

「プラチナ、まさかこんな本で俺が納得すると思っていけないだろうなあ？」

「はい、心当たりがありますので、少々お待ち頂けないでしょうか」「そうか、ならば1日だけ待ってやろう」

雪姫の背中から足をどかし、1日の猶予をクロロはあたえた。

「はっ！ ありがとうございます。」

よかった、1日の猶予もらえた！ 次回の任務は幻海師範の門下生大選考会？ のはずだから、一足先に幻海師範に会いに行こう。幻海師範ならばクロロも納得する珍しい本を所蔵しているはず！ そうと決まれば急がなければ。

あれこれ考えている雪姫に、クロロが話しかける。

「プラチナ、クーを還してシャルを召喚しろ」

クロロに首根っこを掴まれて、雪姫の前でプラプラゆれるクー。

「シャルを？ 何か調べ物があるの？」

「この世界の情報が、お前のあやふやな記憶のみというのは不安すぎる。情報は正確でなければならぬ。分かったなら速くしろ」

「はい、クーちゃんまたねー」

「にゃ〜にゃ (またね〜)」

クーを還して、シャルナークを召喚。

クロロはシャルにこの世界を調べるように指示を出し、自らもプラチナの自宅周辺を調べると話し、2人は窓から外に飛び出さず行った。

「私も行こう。でも、1人ってさびしいなあ〜」

ブツブツ言いながら雪姫は、幻海師範の住所を調べ、人に見られ

ないように『ヴァルキリー』でレナスに設定を変更してから飛び立った。

空を飛ぶこと30分。山ばかりのところに屋敷があるのが見えてきた。

見つけた あそこに幻海師範がいるはず！ マンガで見た感じは、ちっちゃいおばあちゃんだけど本物はどんなかなあ？

雪姫が庭に降り立つと、正面の障子があき、縁側に人が出てきた。

「……何奴じゃ」

「どうも、はじめまして。浦飯 雪姫です。幻海師範ですよね？」

「浦飯 雪姫？ お前がコエンマの言っていた奴か」

「あれ、コエンマから私のこと聞いているの？」

「聞いているぞ、お前が霊気ではなく神気を操るとな」

「へえ〜 そうなんだ」

コエンマの奴なに考えて、幻海師範に話してんだ？！勝手に私のこと話したんだから、何かしてもらわないとね。

雪姫がコエンマに何をしてもらおうかと考えていると、幻海師範が話しかけてきた。

「目的があつて来たんじゃない？」

「そうだった……あのね、幻海師範って本読む？」

「本？ あるよ、ついといで」

「やったー！」

幻海師範の後をついて行くと、地下の部屋へ案内された。地下の部屋は施錠されていたが、幻海師範が解錠する。部屋の中に入り、明かりをとるとそこは書庫だった。

おお、おお、すごい！！ この内容ならクロロも納得するはず！！

本棚から一冊取り出して、内容を確認した雪姫は満足そうに幻海師範に話しかけた。

「幻海師範この本、読ませたい人がいるんだけど、一部屋かしてもらえるかな？」

「いいだろう、南側の部屋を使いな」

「ありがとう！」

「そのかわり、選考会の手伝いをしてもらおうじゃないか」

「そんなのでいいの？！ まかせてちょうだい、しっかりお手伝いするから！」

「頑張んな」

選考会の手伝いって事は、幽助と桑ちゃんの様子を近くで観察できるから、ラッキー

めんどくさいけど、一度家に戻って、クロロに報告しないとね。

還すのに視覚で確認できないと無理ってこういう時はダメだね。

普段はあんまり不便に感じないんだけどさ。

自宅に戻りクロロに報告すると、シャルナークは引き続き調べ、クロロのみが幻海師範の所で本を読むことに。幻海師範は勘が鋭

いので、幻海師範の所で召喚するのは避けるために、クロロと雪姫は電車に乗って向かうことにした。

幻海師範の屋敷についた2人は、幻海師範に挨拶をし、貸してもらった南部屋に案内してもらった。クロロはさっそく雪姫に本を運ばせ、自分は読むのに専念することに。

クロロは本を読ませといったら無害だから、よかった。

でも、スゴイ勢いで読んで。結構な量の書蔵はあったけど、半年もつかない。今のうちにクロロの好みそうな本を探さないと。いざとなったら、コエンマに霊界の本を読ませてもらえるようにお願いしようかな。

幻海師範門下生大選考会まで、あと数日。

## 第10話 シャルナークの報告

「プラチナ、次の本を持ってこい」

「お前、順番を飛ばして持ってきたな・・・ 右から4冊目の2冊が抜けているぞ」

「のどが渴いた、緑茶はどうした」

「雪姫、何じゃこの茶の入れ方は」

「ホレ、くじ引きの準備は終わったのか」

「なんじゃこの埃は、ちゃんと掃除をせんか」

どうも、雪姫ことプラチナでございます。

幻海師範の屋敷に部屋をかりてから、3日がたちました。

クロロと幻海師範、どうにかならないでしょうか。

クロロは一日に何十冊もの本を読破していくのは良いんですが、自分で本を出したり片付けたりしないんですよ。だから私が一日に何度も書庫と部屋の往復をしないといけないんですよ。もう、書庫と部屋が屋敷の端と端にあるものだから、一往復するのにけっこう時間がかかって大変です。

幻海師範なんですけど、クロロが人間じゃないってばれちゃいました。

なんでも、幻海師範に言わせると、

「あんなものが、人であってたまるかい」

だそうです。

さすが幻海師範、恐るべし。

クロロに報告すると、本人も分かっていたそうです。

んで、気が付けばいつの間にか2人は茶飲み友達になってました。

なんでそうなるの?!

2人が仲良くなったもんだからさ、人使いの荒いこと荒いこと！  
あれしろ〜 これしろ〜

絶えず指示がとんできます。嫌なら「嫌!」って言えばいいんだけど、あの2人に言える?! 私にはそんな勇氣はありません。逆らったら最後、どこかに逝っちゃうこと間違いなしです。

なので、第三者の誰かさん。

私を助けてくれないでしょうか？

雪姫が、道場の床拭きで汚れた雑巾を洗いながら、黄昏ていると入口から「プラチナ〜」と呼ぶ声が聞こえてきました。

視線を向けると、シャルが手を振っていました。

シャルは、ハンター×ハンターの世界にいた時のような服装ではなく、どこぞのモデルのように、黒のスボン+タンクトップ+七分のカッターを羽織っています。

なんだ、シャルか。

シャルには一度お願いしたんだけどさ、笑顔が怖くて諦めたんだよね。



役に立たないんだよね」

「プラチナ、団長に報告するから一緒においで」

報告に帰って来たんだ。

私も呼ぶってことは、今回は面白い情報があるのかな？

「了解！ すぐに行くから」

「それじゃ、先に行って待ってるからね」

「はい」

急いで緑茶とお菓子の準備をして持っていかないかね。

雪姫が掃除の片付けをし、お茶とお菓子を持って行くと、ニヤリと黒く笑い合う2人がいました。

「どうしたの？」

お茶とお菓子を置きながら、2人に聞いてみます。

クロロがシャルに目配せをし、説明を促しました。

「プラチナ、君が住んでいた街の近くに蟲寄町って町があるだろう？」

「蟲寄町・・・それがどうしたのさ」

「そこで、俺が町の様子を調べてたらさ、なかなか良い感じに歪んだ黒い奴がいたんだよ」

シャルが言う、良い感じに歪んでて黒い奴って、人間やめてる奴だね。

絶対まともじゃないわ。

「名前、聞いたんでしょ？」

「もちろん、？仙水 忍？ って奴だよ」

え？！

「話すとき、良い感じに話が合うんだよね。 プラチナにお願いなんだけどさ、仙水がしんだら彼をエインフェリアに迎えて、俺達の仲間に加えてほしいんだよね！」

マジで？！

雪姫が混乱していると、クロロがニヤリと口を開いた。

「プラチナ、お前そいつのこと知っているんだろ？」

「知ってるよ」

「シャルの話からすると、お前と仙水という奴は知り合いではないが、お前は仙水を知っている。 つまり、仙水はこの世界の重要人物でなおかつ、歪んでいる仙水のことだ、お前の兄の仲間になるとは考えにくい、ということとは敵として登場する奴だな」

幽助の敵になるまで分かるんだ・・・

いつも思うのですが、クロロはなぜ人の心がよめるのでしょうか？

「その通りだけど、幽助と出会うのはまだまだ先だよ？」

「そうか、シャル続きはないのか」

「フフフフ、こつからが面白いのさ。 仙水が、？黒ノ章？つていうビデオを貸してくれたんだ、3日後に返す約束なんだよね」

「でたああー、？黒ノ章？！！！」

「あれでしょ？ 仙水が決定的に歪んだビデオ！！」

「？黒ノ章？とは何だ？」

「何でも、今まで人間がおこなってきた罪の中でも、最も残酷で非道なものの記録だつてさ」

「よし、さっそく見て見るか」

ビデオ鑑賞中・・・

ええつと、3人で見たんだけど、そんな残酷でもなかったです。ビビって損した感じ。

「そんなにこれって非道？」

「だな、期待はずれだよ」

「・・・・・・ この世界の人間は柔ということだな。 仙水を仲間に入れるかは、保留だな」

「仙水を仲間にするかは、保留になりました！」

「こんなビデオで性格歪むつてさ、仙水は優しい人だったのかな？？」

「今後の活躍は、期待できるのかな？」

シャルナークは不満げに言いながら、部屋を出て行った。  
さっそくビデオを返却しに行ったのかな？

シャルが出て行ってから、クロクとお茶を飲んでいると幻海師範  
が近づいてきます。

何の用があるのでしょうか？

## 第11話 幻影旅団、限定復活

「邪魔するよ」

「ああ」

幻海師範が部屋に入ってきます。  
何しにきたんでしょうか・・・

「あなたが相談してきた件についてなんだが、雪姫と一緒にでも問題はないだろ？」

「かまわん、出来そうなのか？」

「準備が出来たんでね、後はやってみるだけさ」

「ほう、それはすごいな」

「苦労したよ、老人を労わってほしいもんさ」

「ふっ、まだまだ大丈夫でしょう」

「??????」

えーっと、何の話をしているのでしょうか。

さっぱり話が見えないのですが。

「今から試すかい？」

「そうですね、出来るかどうか確認をしてみましょうか」

「それじゃ、ついでいで」

「行くぞ」

「?????? はい？」

なんだか逆らえない空気を感じましたので、大人しくついて行きます。

2人の後をついて行くと、山の一番奥にある道場に到着。

幻海師範が仏像？の前に行き、台座を何やらいじっております。

ちゃんと掃除したので、ピカピカですよ。

何してんのかなあ〜って見てたら、幻海師範が台座のある部分を  
押しました。

すると・・・

カラカラカラカラ・・・ ガコン！！

ギギギギギー・・・

仏像が後ろに動き、地下へと続く階段が現れました。

階段の両脇には、しめ縄で何かを封印するように呪が施されてい  
るみたいです。

す、すごくない？！

ていうか、驚いてるのは私だけ？！

なんでクロロって平然としてられるの〜？！

ビククリしすぎで、心臓に悪いわ〜

「ついでに、足元には気をつけな」

「おい、驚いてないで来い」

「はぁ・・・」

階段を降りて行くと、ひんやりとした雰囲気が出てきました。

どうやら到着したようです。 階段の終わりは、かなり広いスペ

ースがあります。

わぁー、ここって上の道場の倍は広さがあるんじゃない？

雪姫がキョロキョロしていると、クロロが近づいてきました。

「プラチナ、？ヴァルキリー？をだして召喚可能人数を確認してみろ」

「幻海師範がいるけど良いの？」

「俺が話した。それに、コエンマとやらから話を聞いた時点で、普通ではないと覚悟はしていたようだぞ？」

「え、そうだったの？」

ホントかなあ〜って、幻海師範の方を見るとニヤリと笑ってました。

「あたしが気付かないとでも思ったのかい？ 気にせず確かめな、邪魔はしないさ」

「そうなのね・・・ それじゃ遠慮なく？ヴァルキリー?!！」

召喚可能人数の確認と・・・

オロ？ ってマークになってる

これって確か、無限って意味じゃなかったっけ？

「変化があつたか？」

「うん、無限？ になってる。 試してみる？」

「ああ、やれ。 幻海師範、此方に」

「はいよ」

幻海師範がクロロの斜め後ろに移動してから、雪姫は召喚をはじめました。

「フルメンバー召喚してみるね？ 死の、先を逝く者たちよ？」

雪姫の銀翼から溢れた光が人の形になっていく。

やがてみなれた仲間の姿になっていった。

「成功だな」

「すごいじゃないか」

「みんな！！」

「……団長！……」  
「？」

パクノダ、マチ、フランクリン、フェイタン、フィンクス、ノブナガ、ウヴォーギン、コルトピ、ボノレノフ…… ついでにヒソカがいた。

旅団全員が全盛期の姿で、団長のもとに集まった。

「よし、全員召喚出来たようだな」

もしかして、クロロはこの場所ならば全員召喚出来るって確信してた？

「クロロ、どういこと？」

雪姫がクロロに説明をもとめると、クロロは全員を見渡す。  
幻海師範に視線をやり、説明をはじめた。



内容は、なぜこの世界では召喚可能人数の設定が4人と決められていたのか。プラチナから神様とやらの話を聞く限り、その設定はこの世界のバランスをとるための処置だったのでは。ならば、この世界のバランスを崩さない条件の下ならば召喚可能人数が変化するのでは。この考えのもと、この世界最高峰の靈波動の技術をもつ幻海師範に、靈気・神気が外の世界に漏れない完全結界の作成を依頼。実験の結果、完全結界の中ならば旅団全員を召喚出来る事が実証された。ということだった。

なが・・・・・・・・

「つまり、こうして団員全員が現実世界で集まれるのは、現在のこの地下道場のみということだ。幻海師範、ご協力感謝する」

クロロが人に感謝してるとこなんて、ものつつつっすごい久しぶり！

「なに、貸しひとつね」

おおお、さすが幻海師範。　クロロに貸しをつけるとは・・・

「それではいつか、返しますよ」

クロロの笑顔が気持ち悪いです。

「プラチナお前、久しぶりに修行をつけてやるうか？」

「！！　いいえ！　遠慮しますー」

プラチナがクロロの暗い笑顔からダッシュで逃亡していく。

他の団員達は、クロロとプラチナの姿を微笑ましく見守っていた。

「もうすぐ結界の外に出るな・・・」

団長のつぶやきを拾った団員達は、団長の考えにピンときたよう  
だ。

プラチナが結界の外に出た場合、召喚された旅団はどうなるのか。

・

3・2・・・1・・・

「ふん、還らないか」

「団長、この結界の中ならば自由に出来るということですか」

「団長！！ 暴れてもいいのか?!」

「？」

団員を見わたしたクロロは、幻海師範に最後の確認をした。

「幻海師範、ここの強度は？」

「そんじょそこらの力じゃ破壊できないね。それに、一日たてば自動的に復元されるからの、心配せずに修行をするといいさ」

「ということだ、好きにするがいい。今現在、結界の外に出られるのは2人。シャルと俺が外にいるから、外に出たい奴はシャルナークに交代してもらえ。俺は読書で忙しい、いいな？」

「・・・了解」

「還りたい奴は、次にプラチナがきた時に言え」

幻海師範の屋敷は、完全結界のなか幻影旅団の新しいホームとなった。

幕間 仙水 忍

変な奴が、俺に会いにきた。

金髪でモデルの様な服を着た、無駄な筋肉が無い引き締まった体をした男だ。名前は、シャルナークと名乗っていた。幻影旅団と言う組織に所属しているようだが、聞いた事は無い。

だが、奴からは底が知れない闇を感じた。

俺はシャルナークを見極めるために？黒ノ章？を貸した。人間の最も残酷で非道なものの記録。奴が本当の闇を抱えているならば、俺の考えと共感できるはずだ。

「やあ、ちょこつとぶりだね」

カフェで本を読みながらコーヒーを飲んでいると、シャルナークがやって来た。ビデオを貸したのは昨日。一日しか過ぎていない。返却にしては、早すぎないだろうか。

「シャルナークか、今日はどうした。アレは見たのか？」

「ああ、アレね。ちゃんと見たさ」

「どう感じたんだ？」

「あれ？君が人の意見を気にするんだ、意外だよ。団長と見た感想は、特に無しかな」

「特に無し……」

シャルナークの感想を聞いて、仙水は読んでいた本を閉じた。

シャルナークが所属する幻影旅団。？黒ノ章？を見て感想が特に無しといことは、俺が思うほど闇をもっていなかったのか…やはり俺と共感できるほどの闇をもった人間は誰もいないのか、期待はずれだ。

仙水が心の中で結論を出し、シャルナークに視線を向けた。シャルナークは仙水の前に座り、注文したコーヒーを飲んでいたが、仙水が視線をよこしたのに気付कि、ニヤリと笑みを浮かべて声をかけた。

「そのビデオさ、大したことなかったよ。仙水が人間の最も残酷で非道なものの記録だっていうから期待したのにさ、がっかりだよ」  
「大した事がない・・・」

「今後の活動に期待してるから、ぼちぼち頑張ってよ」

シャルナークは驚く仙水を残して、帰っていった。

「今後の活動に期待か・・・」

仙水が呟いていると、離れて様子を伺っていた樹が近づき声をかけた。

「忍、どうしたんだ？」

「あのビデオを見ての感想が、？大した事がない？だそうさ。俺達の活動に期待だと言っていたよ」

「そうか。大丈夫なのか？」

「問題は無い、彼らは傍観者さ。遙か高みから俺達を見下ろしているのさ、邪魔はしないだろう」

「わかった。計画は変更しなくてもいいんだね」

「ああ、俺達の計画を知ったら彼らも興味をもつだろうか・・・」

幻影旅団のシャルナーク、君だけじゃなく団長と話をしてみたい。彼らの闇は俺にとって、とても心地がいい。俺の感じている闇には、まだまだ先があるようだ。彼らはそこにいる。

仙水は、彼らの闇の深さに思いをはせる。

いつか自分も闇の深部に迫る夢をみて・・・

幕間 仙水 忍（後書き）

久しぶりの投稿です。

キャラが壊れてるかも・・・

読んでくれて、ありがとう。

第12話 門下生大選考会 ? (前書き)

読み返し、あまりの酷さに冷や汗が・・・  
少し訂正しました。

ましになっているといいのですが。

## 第12話 門下生大選考会 ?

ついに、幻海師範の門下生大選考会の日がやってきた。

旅団が限定復活してから、少しドタバタしが何とか準備が間に合い良かった。一時はどうなるのかとハラハラしたが、何とかなるもんです。

先日、コエンマから潜入捜査の依頼がありました。内容は、幽助と一緒に選考会へ参加し、乱童という妖怪を確保すること。もちろん断りましたよ。司会が選考会に参加しちゃダメでしょうが。そろそろ時間なので、会場に移動しますね。

会場には様々な姿の人が集まり、雑談をしていた。

雪姫とクーが障子の隙間から覗いていると、幽助・桑原がすぐに見つかった。

桑ちゃんも参加するんだ。けっこう霊感鋭いから、いい線までいくね。

それにしても、何あの服装。

あんな服装で電車に乗って来たのか？

観察をしている間に開始時刻となり、幻海師範がやってきた。

「雪姫、準備はいいかい？」

「はい幻海師範、何時でも大丈夫ですよ」

「それでは始めようか」

「はい！」



クーを肩に乗せた雪姫が障子をあげ、幻海師範を先に通す。  
幻海師範に視線で促され、雪姫はマイクのスイッチを入れて話し始めた。

「お待たせしました。　只今より、幻海師範の門下生大選考会をはじめます。　司会進行役の雪姫です、最後までよろしく願います。　まずはじめに、幻海師範より一言お願いします」

広場が静まり、雪姫は幻海師範より一步後ろに下がる。

「あたしが幻海だ。　今回の選考会でめばしい奴がいなかった場合、この雪姫を門下生とする。　精々頑張るんだね」

「「「「「はあああ!?!」「」「」「」

そんなこと聞いてないよー

何をいきなり言いだすんですか幻海師範。

師範の弟子なんて冗談じゃない。　只でさえ今でもこき使われてるのに、さらに弟子になんかなったら・・・

幽助に頑張ってもらわないとヤバいわ。

「なにを呆けとるんだ、さっさと説明をはじめな!」

「はいっつ、　第一次審査は、くじ引きになります。　この瓶からくじを一つだけ選ぶとって下さい。　当たりのくじは中に赤い紙が入っています。　それでは、前の方から順番にどうぞ」



ラリと吹っ飛びあつという間に見えなくなった。

あまりの無敵ぶりに会場内は静まり、息を飲んだ。

(あの娘より、幻海師範の門下生になる才能を持った奴なんているのかよ・・・ムリじゃね?!)

受験生が呆然とする中、幻海師範が声をかけた。

「ほれ、ボーっとしてるんじゃないよ。合格した奴は、二次試験の会場に行くよ」

「そうですね。くじ引きに当たった方は、此方にどうぞ」

「「雪姫ってあんなに強かったんだな。怖い娘!!」」

幽助と桑原はおどけたように言いながら、二次試験会場へと歩いて行った。

第12話 門下生大選考会 ? (後書き)

読んで下さり、ありがとうございます。

主人公の設定がブレはじめたので、練り直したいと思います。

更新がとても遅くなっていますが、  
これからもよろしく願います。

### 第13話 門下生大選考会 ?

第一次審査に合格したのは、約50名。

雪姫の案内のもと、合格者たちは第2次審査会場に到着した。

「こちらですので、止まらず奥まで入って下さいね」

「なんじゃこりゃ！ まるつきりゲームせんだーじゃねーか！」

続々と会場に入った受験生達は、幽助と同様の反応を見せた。旧式から最新のもでそろっているゲーム機を見て驚く受験生。全員が入ると雪姫が話しはじめた。

「2次審査は、ゲームをしてもらいます」

「失礼ですが、弟子の審査とゲームはどういうつながりが!？」

「ただのゲームではありません。霊能力の高さを測れるゲームです。霊力がないとどのゲームも得点を得られません。ゲーム機の内容ですが、

ジャンケンゲームで霊感能力を測定

霊感能力とは、霊的な道具や呪文を扱える力量や感覚の鋭さです。15回勝負、10勝以上で合格

パンチングマシンで霊撃力を測定

霊撃力とは、霊的な攻撃力や瞬発力の強さです。3回挑戦、120p以上で合格

カラオケゲームで霊気量を測定

霊気量とは、肉体に内蔵されている霊気＝生命力の量です。1  
回挑戦、70p以上で合格

これら3機種のゲームに挑戦していただき、2つ以上合格ライン  
を越さなければ失格です。」

「2つ以上か、けっこう難しそうだな」

「説明は以上です。最後になりますが、どのゲームも100円入れ  
ないと動きませんので、ご注意くださいいな?」

「「「えっっっ!」「」」

「しないんですか? まさか、セコイなんて思ってないですよね」

会場の空気が下がる。

雪姫がおもむろにマイクを受験生に向け、微笑んだ。

「さっさとしないと、撃つよ?」

「「「はい!」」」

2次審査合格者は、15名。

幽助・桑原も無事に合格。

「幻海師範、15名が合格しました。第3次審査の準備が完了しているか確認するので、休憩をはさみますね」

「そうだね。雪姫、やりすぎるんじゃないよ」

「わかってますよ」

雪姫は、2次審査合格者に15分の休憩を伝え会場を出て行く。

雑魚に用はないのよ。

次の審査でいったい何人が通れるのか、楽しみね。

幽助と桑原は、対戦ゲームに熱中しており気付かなかった。  
会場を出て行く雪姫の顔が、何かを企んでいるように歪んでいたことを。

第13話 門下生大選考会 ? (後書き)

短くてごめんなさい。

あまり間があかないように、頑張ります。

12月10日 誤字を訂正しました。



## 第14話 休憩×黒い和服の男

雪姫が第2次会場を出て行くのを見送った幽助は、ゲームをしている時に気になった事を桑原に話しかけた。

「桑原、お前さっきのパンチングマシンの最高記録覚えてるか？」

「ああ、ポイント 999P ポイント ウボオー って奴のことか？」

「お前が129Pで俺が155P。ポイント 桑原お前、気付いたか？ ウボオーって奴だけじゃないんだぜ？」

「知ってるよ。カラオケのコルトピ、インベーダーゲームのシャル、ジャンケンゲームのマチ。こいつらはヤバイって俺の勘が言ってるぜ、浦飯」

「確かにな、半端ねえよ」

「ああ」

ゾワッ

「！！」

突然、背筋に悪寒が走った。2人が振り向くとそこには、幻海師範と一緒にお茶お飲む黒い和服姿の男がいた。男の口は笑っているが、目が笑っておらず冷めていた。まるで2人を見極めるように。

「.....」

男はスツと手を2人がいる方向に向かってかざし、手に<sup>オーラ</sup>気を集めはじめた。男の手に何かが集まって行くのを感じた2人に、冷や汗を流れる。男の口が？よけてみる？と動いたのを見た2人は、固まって動かない体に活を入れて動いた。その瞬間、男の手から<sup>オーラ</sup>気が放たれた。

「「ぎゃー！ー！ー！ー！」」

<sup>オーラ</sup>気の進行方向にいた受験生が、会場の外へと目には見えない何かに吹っ飛ばされていった。

ヤバイ、本<sup>マジ</sup>気でヤバイ！何なんだよ、あいつ！俺と桑原が横に動いた瞬間、奴の手から何かが出たのは分かったが、見えなかった。霊気が見える俺なのに、なぜ見えなかったんだ！？

幽助が男を見ると、幻海師範にボコられていた。

あいつ、大丈夫か？ああ、そんなに髪の毛ひっぱたらハゲるぞ・

幽助が男の頭皮を心配しはじめたところ、雪姫が会場に戻って来た。

「皆様、お待たせしました。第3次審査の準備が完了いたしましたので、5分後に移動します。忘れ物の内容に持ち物の確認と、こちらの書類にサインをして提出してください。」

出入り口の近くに置かれた書類を最初に読んだ受験生が、驚愕の  
声を出した。

「同意書？ 第3次審査以降の試験において、軽傷及び死亡したと  
しても、責任は門下生大選考委員会にはありません。以上の事を  
認めた上、署名をします!？」

「「「なんだって!？」」「」」

騒ぎ始めた受験生達は、司会進行役の雪姫に詰め寄った。

「あんだ、これは一体どういうことだ」

「何か問題でもございましたか？」

「問題って、死亡しても責任がないって言うのは何なんだよ!」

「??？」

受験生が問題とする事が理解できないというように、雪姫は首を  
こてんと横にかしげ、問い返した。

「幻海師範の門下生を選ぶにあたって、誰も死なないなんて本気で  
思っているんですか？」

誰かが死ぬ事を前提に話し、可愛らしく微笑む雪姫に受験生達は  
引いた。

「あと2分で移動をはじめますので、速やかに提出してくださいね  
？」

あ然と雪姫を見送った受験生だが、幽助が署名をして提出したのを見て、遅れまいと次々と署名をしはじめた。中学生の子どもに負けじと意地を張った結果、全員が同意書に署名をして提出をすることとなった。

受験生が署名をするなか、雪姫は黒い和服姿の男をボコる幻海師範をなだめていた。雪姫に助けられた男は、幻海師範に一言声をかけ奥の間へと出て行った。

あいつと雪姫は知り合いなのか。本気でヤバい奴だが、一度は話してみたいぜ。

「桑原もあいつと話してみたいと思わないか？」

.....

「あれ？」

桑原が横にいますとばかり思っていた幽助は、返事がないことに驚き隣を見た。すると、桑原は顔を半分地面にめり込ませて、手足がピクピクと動いていた。

「お前、勘は良いのに避けきれなかったのかよ」

「うがぁー!!」

「元気だな、桑原」

奇声を発しながら復活した桑原に、幽助がニヤニヤしながら声をかけた。

「少しは助けるよ、浦飯！」

「なんで俺がお前を助けにやらなんのだった」

「んだとコラ！！」

「それよりもう時間だ、行こうぜ」

「ちっ、・・・おう！」

2人が会場の外に向かうと丁度、雪姫が出発の確認をするところだった。

「それでは時間になりましたので、第3次審査会場に移動します。遅れないで下さい」

雪姫と幻海師範を先頭に、受験生は次の審査会場へと進みだした。この後、一部の受験生にとって地獄が待ちかまえているとも知らずに。

## 第14話 休憩×黒い和服の男（後書き）

メリークリスマス!!

今日は私の誕生日なので、頑張つて投稿してみました。  
毎度のことながら、完成度が低くごめんなさい。

年末にお休みがあるので、年内にもう一度は投稿できるように、  
頑張りますね〜！

誤字脱字があれば、教えて下さい^^

そういえば、ハンターハンターってキメラアント編は終わったので  
しょうか？

## 第15話 門下生大選考会 ？

第3次審査会場は、寺からだいぶ距離がある不気味な森だった。

「こちらが第3次審査会場となる『魔性の森』です。森の中は、磁石がきかない未開の地域で、危険な生物と妖魔の類の棲み家となっています。入ったら最後、普通の人間は無事には出られませんので、ご注意くださいいなね？」

「こんな不気味な森で何をしようって言うんだ！」

「ここから見える、あの大木へ2時間以内に到着する事です。とても簡単でしょ？」

雪姫が可愛らしく、首をこてんと傾けていった内容に、受験生の一部が騒ぎだした。

「奥義の体得はしたいが、こんな森に入ったら命がいくつあっても足りん！俺はここで辞退させてもらう！」

「俺もだっ」「」

1人が辞退すると、他の受験生も次々と辞退していく。そんな受験生の姿を見て、幻海師範がぼそりと言った。

「少しでも靈感のある奴なら、この森の怖さは十分肌で感じるだらうね」

幻海師範の言葉を聞いた、ひげを生やした壮年の受験生と見事に

ツルッパゲの受験生が、腕を組み師範の言葉に同意するように言った。

「師範の言う通りだ、ここから先は正当な修業をした者のみ挑戦した方がいい…。」

「ハンパな奴は、さっさと帰りな！」

ツルッパゲの言いように、ムカツときた幽助は反射的に言い返していた。

「俺はやるぜ！」

「オメーがやるならオレもやるぞ！」

「なに対抗意識燃やしてんだバカ…。」

「んだとコラ！」

あちら、仲がいい事で。幽助と桑ちゃんにつられて、かなり残ったわね。あんまり逃げられても困るから、ちょうど良かったわ。

「もう辞退される方はいませんか？」

受験生が頷いて同意したのを確認して、雪姫は最後にアドバイスをした。

「それでは、今から2時間以内にあの大木へたどり着いてください。森の中には私の仲間が4人います。見つかると妨害をしてきますので、靈感を働かせて、危険な道を選ばないよう頑張ってください。



ね。 まあ、幻海師範について行くのが、一番早いんですけどね。」

「先に行くぞ、雪姫」

「はい、幻海師範。 全員が出発するのを見届けてからすぐ行きま  
す」

幻海師範は雪姫の返事に頷くと、あっという間に森の中に入って  
き、見えなくなっってしまった。

「は、速え！ に、人間じゃねエ」

あまりの速さにあ然とする受験生を雪姫はしばらく見守っていた  
が、幽助や桑原などが次々と出発するなか、一部の受験生がまだポ  
ーっとしていた。 じれた雪姫は、マイクを気で強化しながら、受  
験生に話しかけた。

「さつさとスタートしないと・・・ ぶっ飛ばすわよ？」

「・・・はいっつ」

最後の受験生が、森の中に入ったのを見送った雪姫は移送法陣を  
展開し、ゴールの大木へと移動した。 『ヴァルキリー』を出し、  
審査のお手伝いをしてもらう仲間を召喚。 ちょうどその時、幻海  
師範が到着し、召喚された旅団たちに声をかけた。

「結界内なら好きにしてくれてかまわないよ。 ここが更地になっ  
たとしても、雪姫が元通りにできるんだからね」

幻海師範の言葉に続いて、雪姫が話しかける。

「ばつちり復元できるから、更地にしても大丈夫だけど、結果から出ると地下室に転移しちゃうから、そこだけは気を付けてね。それじゃ、よろしく〜」

「わかってるよ?」

「よっしゃー!!! 久しぶりに戦えるぜー!!!」

「新しい拷問、試すね」

「ちったー骨のある奴がいるといいけどな…」

トランプで遊ぶ奇術師のヒソカ、脳筋バカのウボォー、ドSちびのフェイタン、格闘バカのフィンクスら4人がそれぞれ森の中へと散らばって行く。

「さあ、何人がたどり着けるかな?」

「片手も来んじやろ」

「それまで、お茶でもしましょうか」

雪姫は四畳間に茶卓、お茶セットとお茶請けを創造し、幻海師範を誘った。

「雪姫は器用だねエ。 どれ、時間がくるまでゆっくりしようか」

「今日のお茶請けは、いちご大福と醤油せんべいですよ」

そこへ、黒い和服姿の男があらわれた。

「俺も頂こう」

「どっぞ、ちゃんとクロロの分もあるよ」

1時間経過・・・・・・・・

吹っ飛べ！ ビッグバンインパクト！！

ぎゃあああああああー！！！！！！

良い叫びね どこまで入るのか、楽しみね

痛てえー 痛てええよー！！

オラ！！ 逃げてんじゃねエぞ、このハゲ野郎っつ

だずげでくれ ええええええええええ！！！！

手ごたえがないね、君？ 失格だよ？

ぐわあああ はぐうがはあああああ

1時間30分経過……

アハ？ 君は合格？

キモイんだよっつ 変態野郎こっちくんあああああ

君は青い果実？ 熟れるのが楽しみだよ？

てめえ！ なに興奮してんだっつっ

アハハハハハハ？

幽助はやっぱり青い果実だったか・・・ 妹が応援してるかなね  
！ ファイト

2時間経過……

たどり着けたのは、ちび（乱童）・幽助・桑原、の3人のみ。

桑ちゃんたち（乱童）は、靈感があったから上手いこと旅団のみんなを避けて来れたんだよね。 幽助は変態ヒソカの合格をもらって見逃してもらえたんだけど… ご愁傷さまでした。 他の受験者は、ウボォーにふっ飛ばされたり、フェイタンに切り刻まれて拷問されたり、フィックスにぼっこぼこにされて全滅。 一般人に毛が生えた程度じゃ、みんなの相手はキツかったみたいだね。

「それでは、時間になりました。 第3次審査の合格者は、3名です。 最終審査は、寺の裏庭で行います。 ついて来て下さい。」

雪姫と幻海師範は、3人を連れて寺へと向かい、クロロはその場に残り見送った。雪姫たちの気配がなくなると、クロロの元に審査を手伝っていた旅団が集まった。

「団長、この世界の人間は弱すぎだぜ！」

「すぐ死ぬね」

「手ごたえがねえ」

「？」

クロロは目を閉じ、畳の上で胡坐をかきながら、4人の話を聞くだけで何も答えない。

「団長！ こんな世界で何をするんだ！？」

ウボオーがクロロに詰め寄る。目を開けたクロロが立ち上がり、畳から降り言った。

「プラチナの話では、この世界はある時期がくると、魔界と言う妖怪が棲む世界へ移動できるらしい。詳しい内容は覚えていないよ。うだが、鍵はプラチナの兄・浦飯 幽助だ。」

「青い果実だね？」

「そうだ。浦飯 幽助の行動を観察すれば、魔界に移動できる。」

魔界には、俺達が見たこともない宝や強い奴がいるらしい。不確定要素が多いが、こればかりは仕方がない。いつ何が起きても

対処できるよう準備だけはしておけ」

「魔界か！！ 強い奴に会えるのが楽しみだぜ」

「わかたね」

「もう時間だね？」

ヒソカがそう言った瞬間、雪姫が簡易結界の外に出たため、クロ口達は銀色の光となり消えていった。

第15話 門下生大選考会 ? (後書き)

今年もあとちょっとで終わりますね^^

ギリギリ投稿が間に合いました

来年もよろしくお願いします。

良い年を〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0668s/>

---

幽遊白書と雪姫 + 旅団

2011年12月31日23時51分発行